

ナシ栽培におけるチャノキイロアザミウマの防除法

[要約]

ナシ園におけるチャノキイロアザミウマ各世代の発生ピーク日は、有効積算気温により予測可能である。有効薬剤が生息部位である新梢先端に付着するように散布することにより、寄生個体数を軽減できる。

農業総合センター園芸研究所

平成25年度

成果
区分

技術情報

1. 背景・ねらい

近年、県内のナシ産地において、チャノキイロアザミウマによる新梢先端葉の褐変、萎縮および落葉の被害が発生している。しかし、ナシ栽培における本種の発生実態や防除法は不明な点が多く、対応に苦慮している。そこで、ナシ園における発生実態の解明および有効な防除法を解明する。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 黄色粘着トラップによる誘殺数と有効積算気温から求めた各世代の発生ピーク日がほぼ一致することから、ナシ園におけるチャノキイロアザミウマの発生ピークは、有効積算気温により予測可能である（図1）。
- 2) 防除効果を上げるためには、チャノキイロアザミウマの生息部位である新梢先端まで薬液が届くように散布する必要がある（図2）。
- 3) ピリフルキナゾン水和剤（商品名：コルト顆粒水和剤）、スピネトラム水和剤（商品名：ディアナ WDG）およびクロルフェナピル水和剤（商品名：コテツフロアブル）は、14日程度チャノキイロアザミウマの寄生個体数を軽減できる（図2）。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 発生ピーク日の算出には、笠間市のアメダス観測所の平成23年および24年の実測値を用いた。第1世代の発生ピークは、有効積算気温が385.6日度に達した日とした。第2世代以降の発生ピークは、有効積算気温が314.9日度に達した日とした（JPP-NET、有効積算温度計算シミュレーションを利用）。
- 2) 予測される発生ピークを参考に、多発前に赤ナシ無袋栽培病害虫参考防除例に有効薬剤（平成24年度主要成果）を追加して散布を行う。本種を対象にS.S.散布を行う時は、送風量を上げるなどして新梢先端まで薬液が付着するようにする。
- 3) 成虫は飛翔により樹間を移動するため、本試験では幼虫の寄生個体数から補正密度指数を算出した。
- 4) 試験に供試した薬剤は、ナシのチャノキイロアザミウマに農薬登録がある（平成26年1月15日現在）。トルフェンピラド水和剤（商品名：ハチハチフロアブル）は収穫前日数が14日前までと長いため、十分注意する。

4. 具体的データ

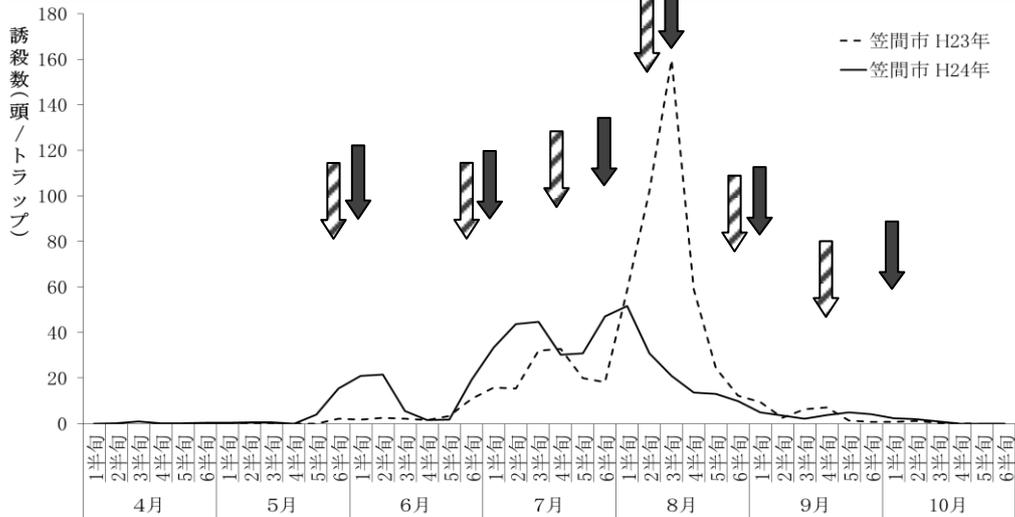


図1 笠間市（無防除園）における粘着トラップによる誘殺数の推移と各世代の発生ピーク日

注) 黄色粘着トラップをほ場の棚面の高さに設置し、5～7日間隔で誘殺された成虫数を実体顕微鏡下で計数した。

矢印は有効積算気温から求めた各世代の発生ピーク予測日を表す。 ▽ : H23年 ↓ : H24年

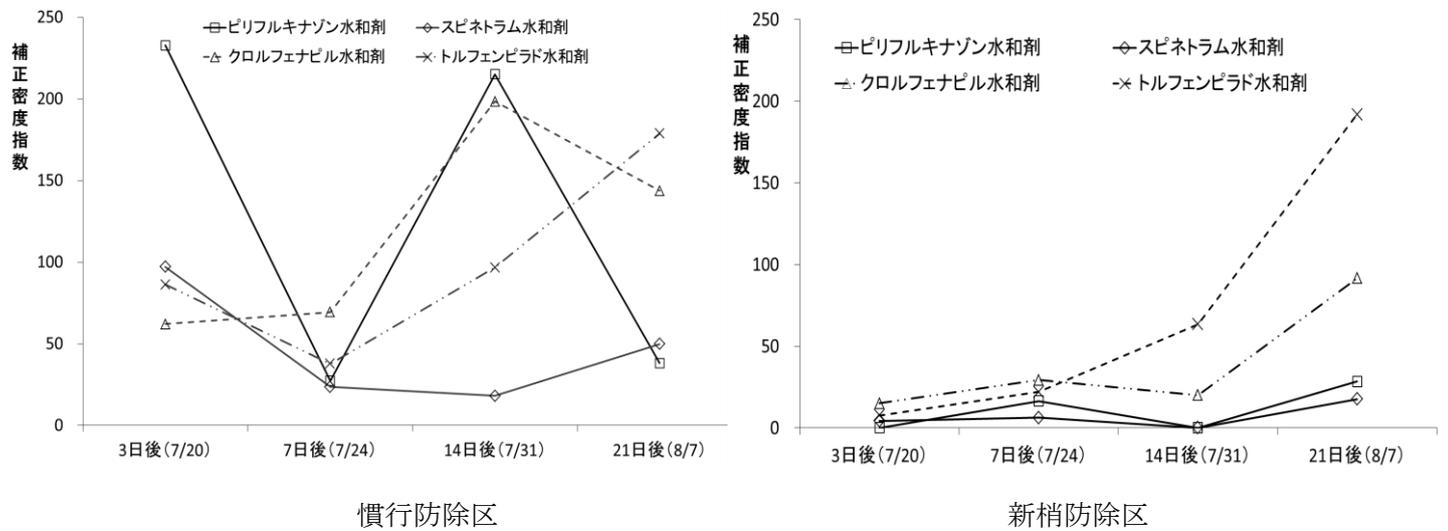


図2 防除部位の違いによる幼虫補正密度指数の推移

注) 補正密度指数 = (処理区の処理後虫数 × 無処理区の処理前虫数) / (処理区の処理前虫数 × 無処理区の処理後虫数)

所定濃度の薬液を、背負式電動散布器を用いて1樹あたり約2Lの割合で、慣行防除区は棚面の葉に十分薬液がかかるように、新梢防除区は新梢先端まで十分薬液がかかるように散布した。各調査日に各区とも任意の新梢葉20枚をサンプリングし、アルコール洗浄法により実体顕微鏡下で幼虫数を計数した。H24年実施。1区2樹2反復。中発生条件での試験。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

ナシ難防除病害虫の発生生態の解明と総合防除法の確立・平成23～平成25年度・病虫研究室